オープンカレッジ

実学の株式投資技術の必要性(23)

株式投資・トレードで着実に毎月儲け

続けるためには「儲けの仕組み」が重要

愛知淑徳大学
ビジネス学部教授
三矢　幹根

みつや・みきね　コーポレートファイナンス・証券投資論・株式投資・トレード技術。元ドイツ銀行名古屋支店支配人。英国リーズ大学経営学大学院・MBA（Finance）。1959年生まれ。

企業経営と同様に株式投資・トレードもビジネスである。利益を毎月出し続けるためにはしっかりとした「儲(もう)けの仕組み」、つまり、「ビジネスモデル」が必要である。偶然に頼ったやり方では何度も再現することは難しい。では何をどのように組み立てれば良いのか。

①まず株価を動かす原理的力、つまり「株価の原理原則」を理解しておくことである。株価Pは予想EPSと予想PERの積で決まる。予想EPSは業績見通しであり基本的に3カ月ごとに修正されるが、毎日変化することはない。これは大洋の「潮流」に例えられる。それに対して、予想PERは将来に対する楽観・悲観の度合いを表しており、日々刻々と出現する株価材料により楽観・悲観の度合いは常に揺らぎ、株価を毎日変動させる。これは大洋に気まぐれに吹いている「風」である。

したがって、②個別株だけを観測しているのではなく、株式相場全体の背景の変化（例えば、日米中の景気動向、インフレ率、金利、外国為替相場、原油相場など）も常に意識しておく必要がある。

③少し先の未来ですら株価の揺らぎを正確に予測することは不可能だが、手掛かりはある。株価チャートが示唆する「定石」である。それでも時には「嵐のような暴風」が吹き荒れ、短期間で驚くほど株価を暴落させることもある。では原理原則と定石を駆使しても読めない未来の動きに対してどう対処すればよいのか。

④自分の想定と逆行しても困らないように常に「逆指値で逆行に備えておく」のである。

次に、⑤「勝負する時間枠」を決める。時間枠の長さにより必要とされるスキルと知識が大きく異なるので、この時間枠の意識的な設定は極めて重要である。さらに、⑥「戦う場所・範囲」を決める。例えば、東証プライムの内、流動性が十分高く株価の動きが相対的に滑らかな貸借銘柄の約200銘柄のみを監視銘柄とする。

その次は、⑦株価の局面に応じてどのような戦略（買い狙い、売り狙い）と戦術（押し目買い、戻り売りのような仕掛けの型）を使うのかあらかじめ決めておく。戦闘法（順張り、逆張り、一括仕掛け・一括手仕舞い、分割売買などの細則）もあらかじめ決めておく。

⑧株式相場は「未知の大洋を航海」するようなものだから信頼できる「羅針盤」が必要である。羅針盤なき航海は必ず迷走する。スイング・トレード（数週間以内にいったん利益確定する）とポジション・トレード（半年から1年以内にいったん利益確定する）を前提として次のような羅針盤（株価サイクル）を考える。

例えば、10日・25日・60日移動平均線の位置とそれぞれの傾き、株価がそれらの上下のどこにあるのかにより株価変動を、底から天井、天井から底まで八つの局面に峻別（しゅんべつ）して観測する。それにより株価の方向性とその力の強さ感じながら、買い、利食い売り、買い直し、再び利食い売りというように波乗りを淡々と続けながら着実に儲け続ける。この羅針盤は個別銘柄の売り買いのタイミングを測るだけでなく、監視銘柄群から銘柄選択するツールとしても活用できる。